2023年（令和5年）
3月20日
月曜日
夕刊
神戸新聞

随想　かかりつけ医とは

長尾　和宏

コロナ禍で「かかりつけ医」という言葉が有名になった。しかし「発熱したらかかりつけ医に相談を」と言われたので電話したが診療を拒否された、という苦情もよく聞く。そもそも、国は「かかりつけ医とはなにか」という議論を続けているが明確な結論は出ていない。日本医師会は「なんでも相談できて」「必要な時には適切な医療機関を紹介してくれる医者」と定義しているが漠然としていないか。最近では「かかりつけ医は一人か？」という命題への回答は、「複数でもいい」となっているので、ますます分からない。

以前からある家庭医、総合医、プライマリーケア医などの言葉とほぼ同義と考えている。私自身は、医学部に入学したその日から45年間、かかりつけ医を目指して精進してきた。大学時代は、無医地区活動に熱中し、日野原重明先生（故人）の著書を読み漁（あさ）り講演にも来て頂いた。

昔から専門医か総合医か、という議論はあった。多くの市民は医者なら必ず専門分野があると思っている。パーティーなどで初対面の人から必ず聞かれる質問は「先生の専門は何ですか？」である。私は一息おいて、「専門はなんでも診る科です」と答えることにしている。するとそこで会話は必ず途切れる。実はいくつか専門医資格を有しているが自分の中では「なんでも診る科」が柱なのだ。45年たっても総合医はまだ市民権を得ていないなあ、と感じる。

しかし専門医と総合医は相反するものではなく両立し得るものだと思う。文武両道みたいな話だ。近い将来、開業医は、専門分野だけを診る医者と専門性と総合性の両立を目指す医者に二分されるのだろう。中島みゆきさんの名曲「糸」のように、縦の糸と横の糸を紡ぐのがかかりつけ医、だと勝手に思っている。なによりも患者自身がかかりつけ医を自由に選べることが大切だ。

（長尾クリニック名誉院長）